

2015（平成 27）年度 学生による授業アンケート結果

1. 2015（平成 27）年度 授業アンケートの実施要領

1) 授業アンケートの対象科目

全ての授業形態（講義・演習・実験・実技・実習）の科目をアンケート対象とする。但し、受講者数 5 名未満の科目は担当教員が実施の可否を判断する。また、対象科目の選定に関する担当教員の希望はとらない。

2) 実施期間

前期：平成 27 年 7 月 1 日(水)～7 月 28 日(火)

後期：平成 28 年 1 月 8 日(金)～1 月 26 日(火)

3) 授業アンケートの質問

設問 1. あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか？（選択式）

- a. よく理解できた
- b. まあまあ理解できた
- c. あまり理解できなかった
- d. 全く理解できなかった

設問 2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？（複数選択式）

- a. 機材・資料・板書
- b. 教員とのコミュニケーション
- c. 受講者の数
- d. 授業の内容
- e. その他

設問 3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？（複数選択式）

- a. 授業の内容を確認するため
- b. 授業の到達目標を知るため
- c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため
- e. 活用しなかった

設問 4. あなたは 1 回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか？（選択式）

- a. 60 分以上
- b. 60 分未満
- c. 30 分未満
- d. 15 分未満
- e. 全くしなかった

設問 5. 授業をより良いものにするために、授業を実際に体験したあなたの立場から提案できることがあれば述べてください。（記述式）

4) 集計方法・区分

アンケート結果の集計は以下の区分で集計する。

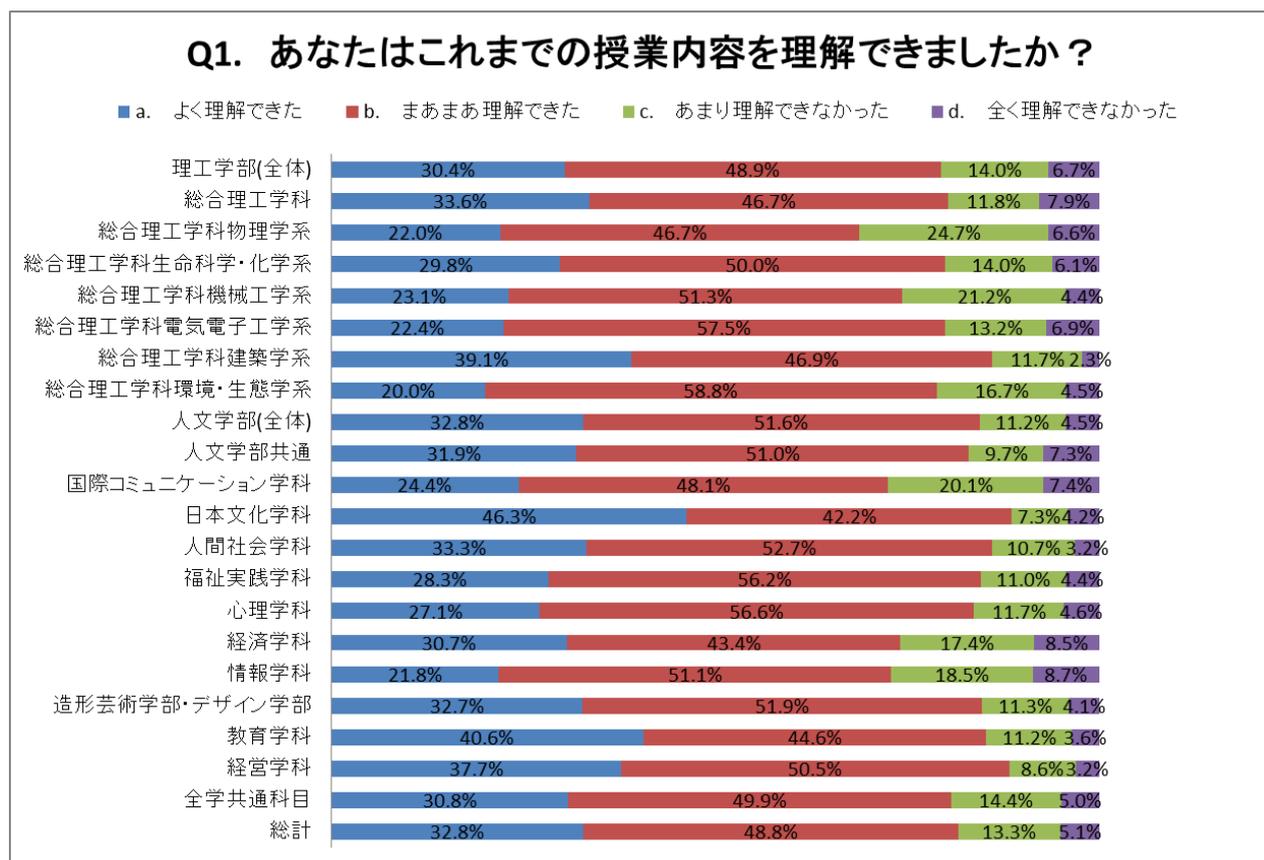
- ①授業科目区分別（全学共通科目、学部共通科目、学科科目、教職・資格科目）
- ②授業形態別（講義・演習・実験・実技・実習等）
- ③受講者数別（0～20 人、21～50 人、51～100 人、101～200 人、201 人以上）
- ④担当教員所属の学部別
- ⑤担当教員所属の学科・全学共通教育
- ⑥個人別

2. 2015（平成 27）年度 授業アンケートの集計結果

1) 対象授業数・回答者数

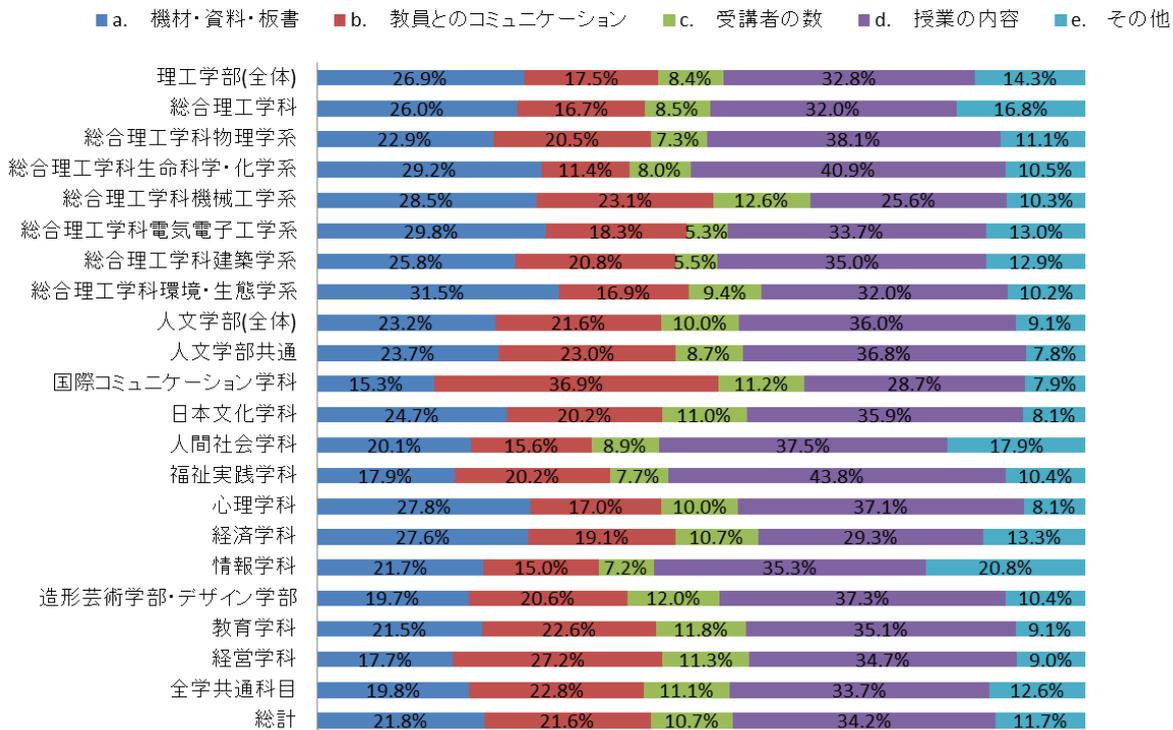
前期： 2614 科目（対象時間割科目数） 回答者数 35761（延べ数）
 後期： 2770 科目（対象時間割科目数） 回答者数 25046（延べ数）

2) 前期集計結果



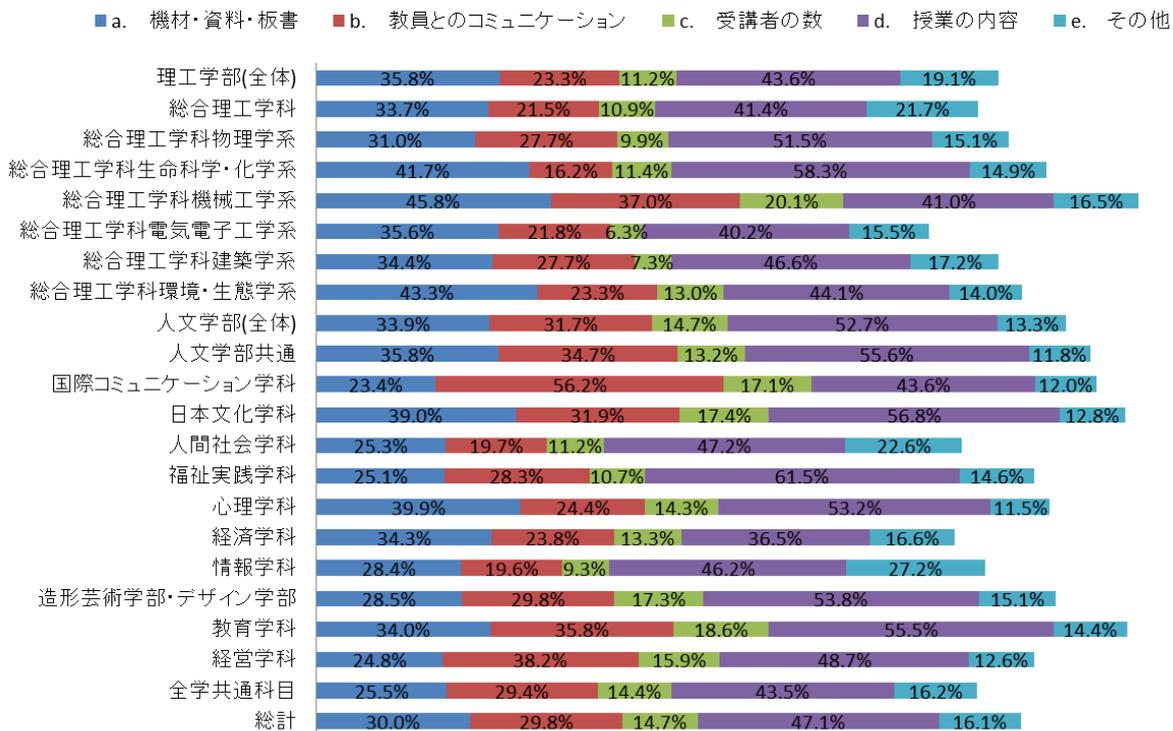
Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

※ グラフは回答数に対する比率(計100%)



Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

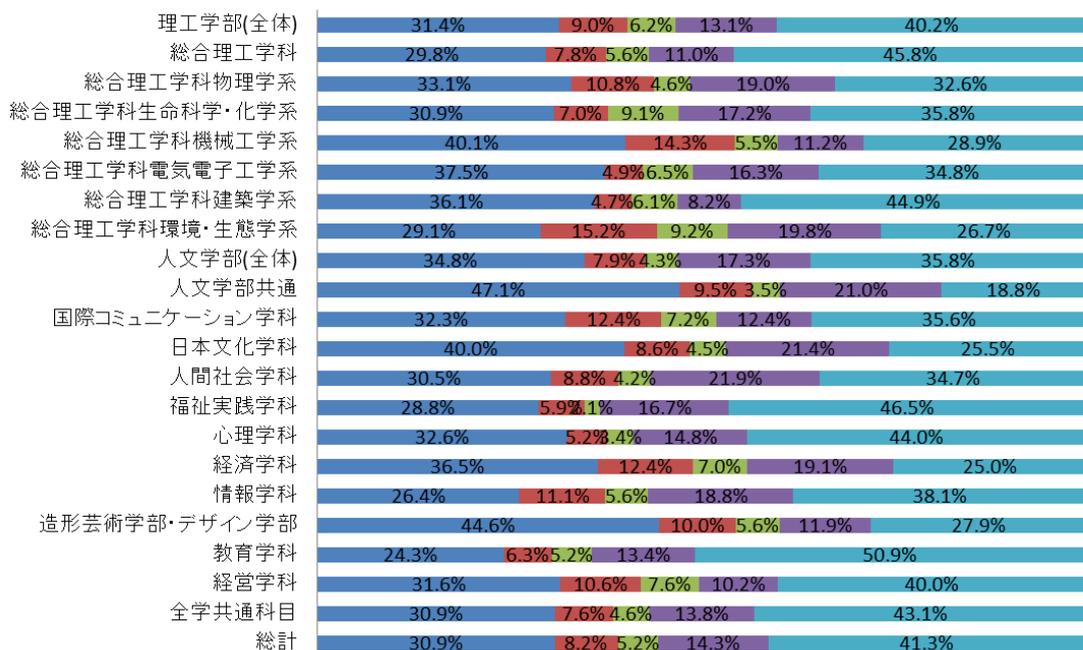
※ グラフは回答者数に対する比率



Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複択】

※ グラフは回答数に対する比率(計100%)

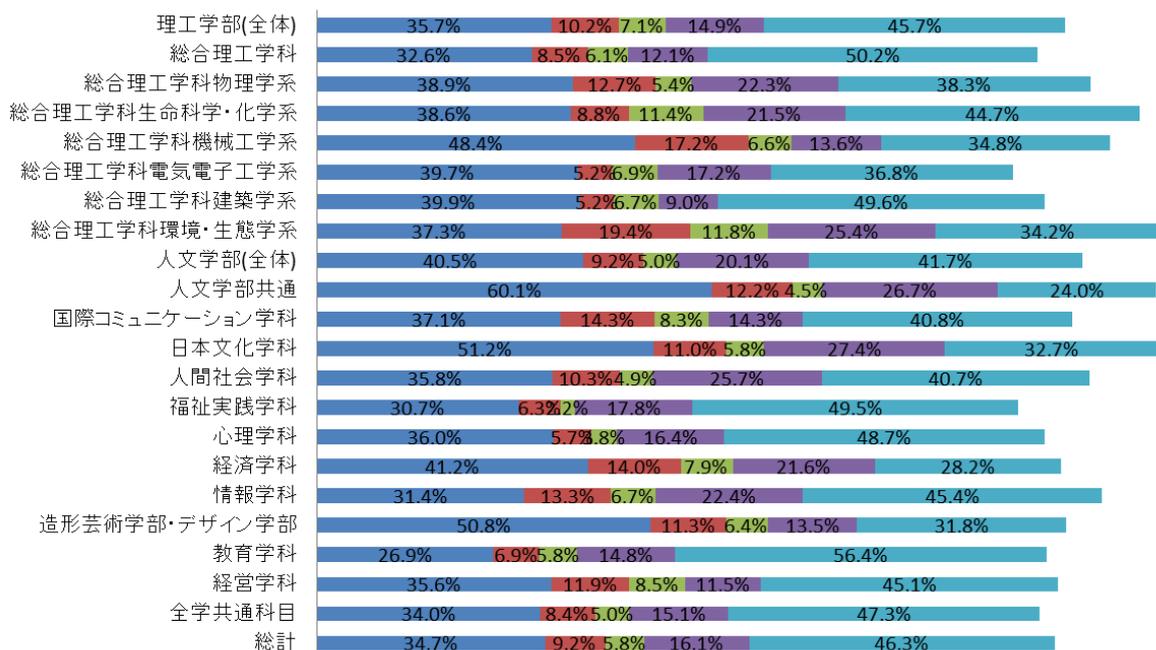
- a. 授業の内容を確認するため
- b. 授業の到達目標を知るため
- c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため
- e. 活用しなかった



Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複択】

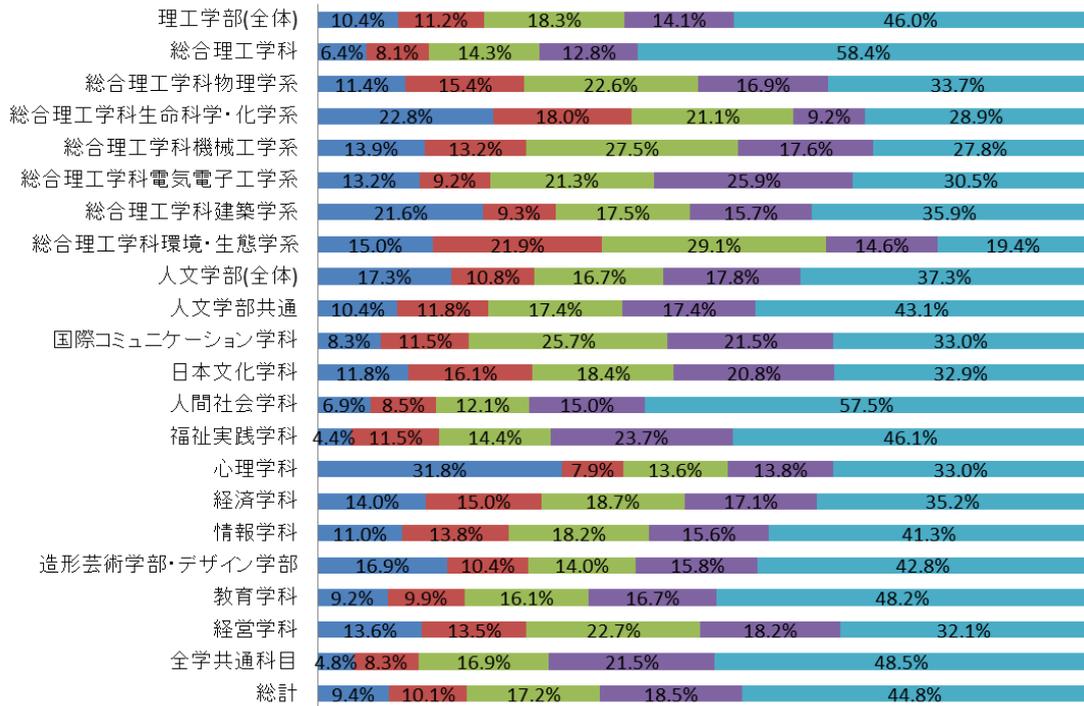
※ グラフは回答者数に対する比率

- a. 授業の内容を確認するため
- b. 授業の到達目標を知るため
- c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため
- e. 活用しなかった



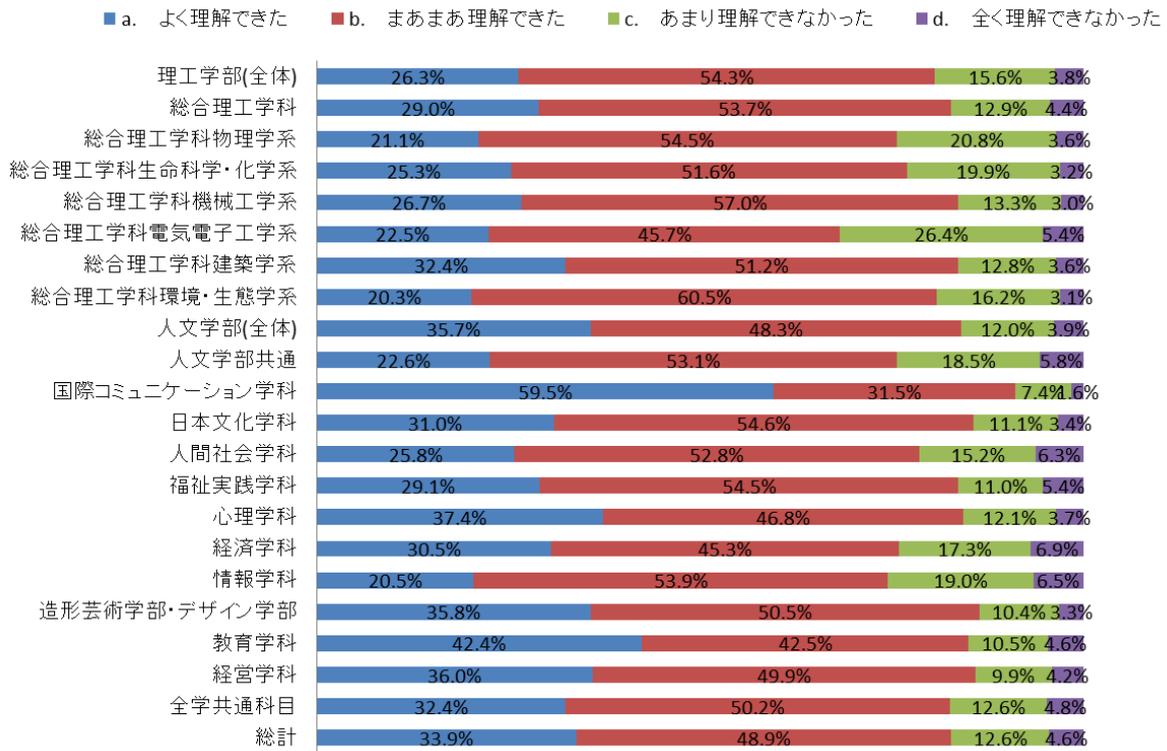
Q4. あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか？

■ a. 60分以上 ■ b. 60分未満 ■ c. 30分未満 ■ d. 15分未満 ■ e. 全くなかった



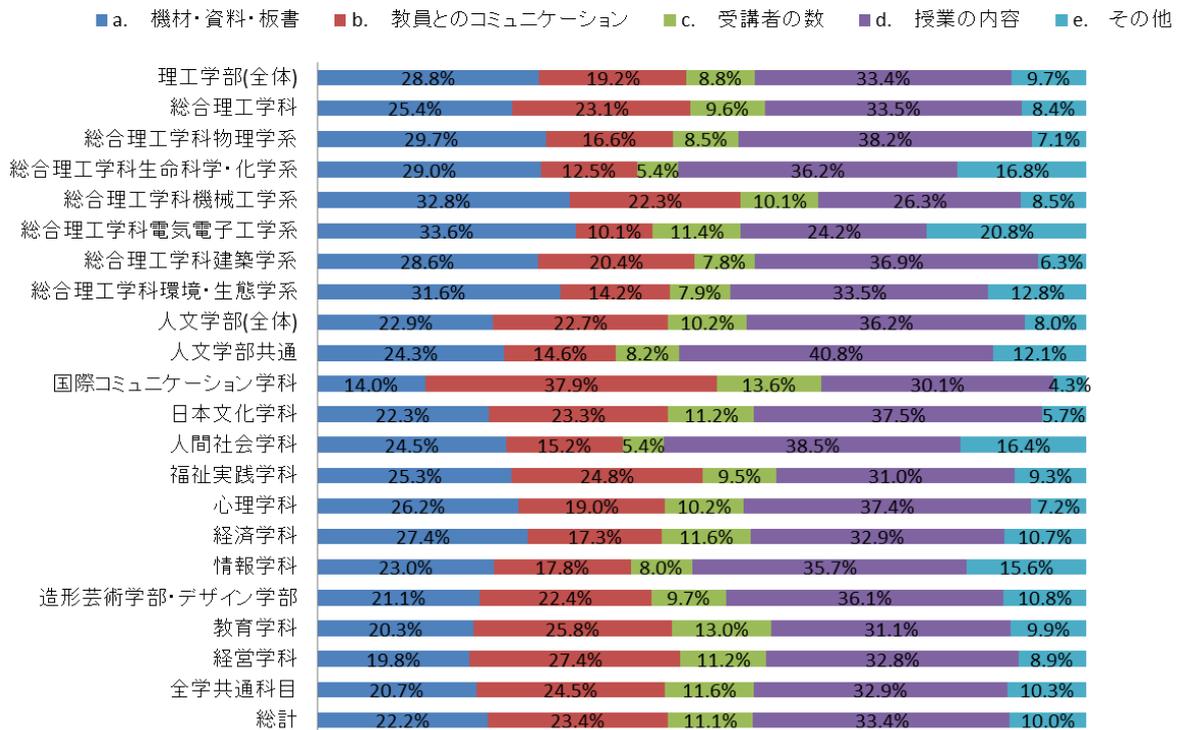
3) 後期集計結果

Q1. あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか？



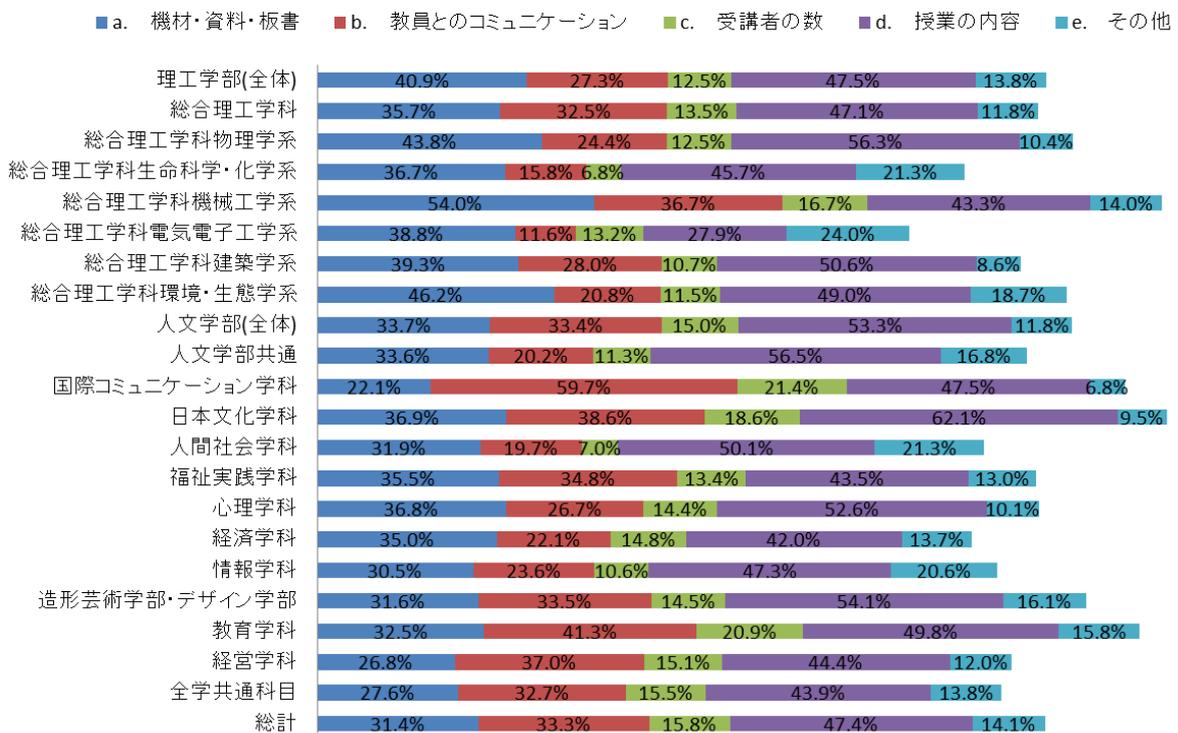
Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

※ グラフは回答数に対する比率(計100%)



Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

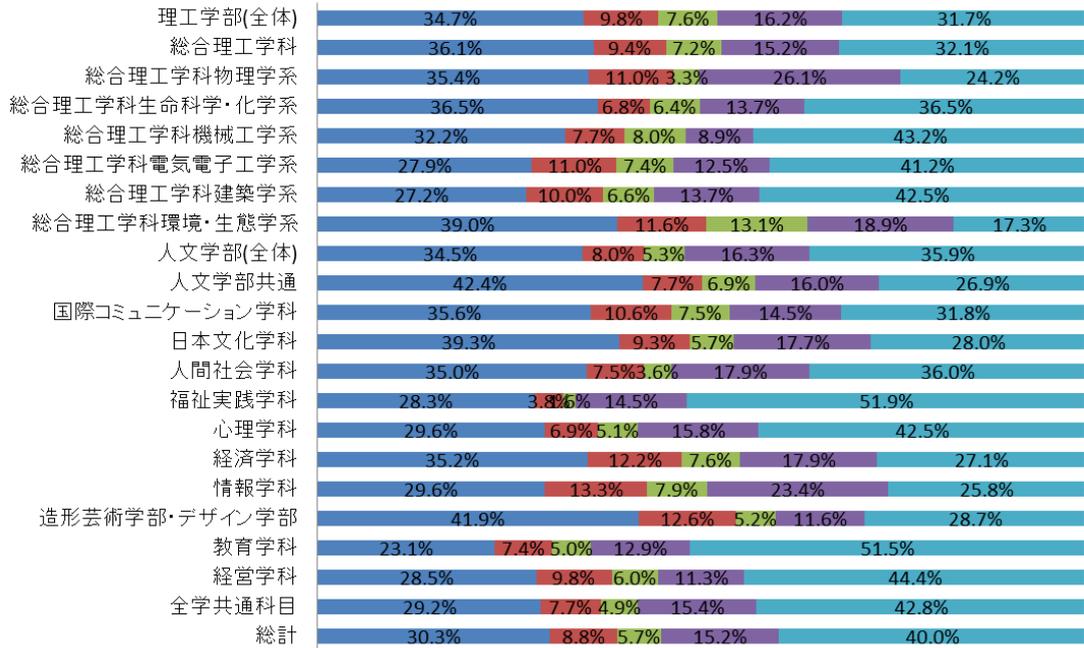
※ グラフは回答者数に対する比率



Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複数】

※グラフは 回答数に対する比率(計100%)

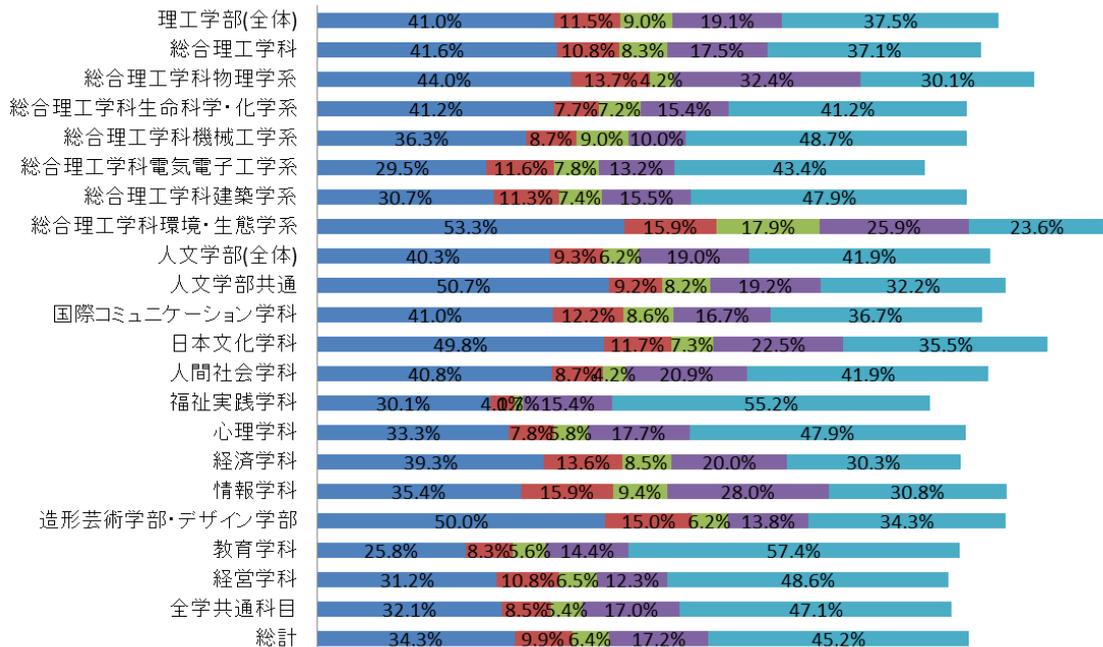
- a. 授業の内容を確認するため
- b. 授業の到達目標を知るため
- c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため
- e. 活用しなかった



Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複数】

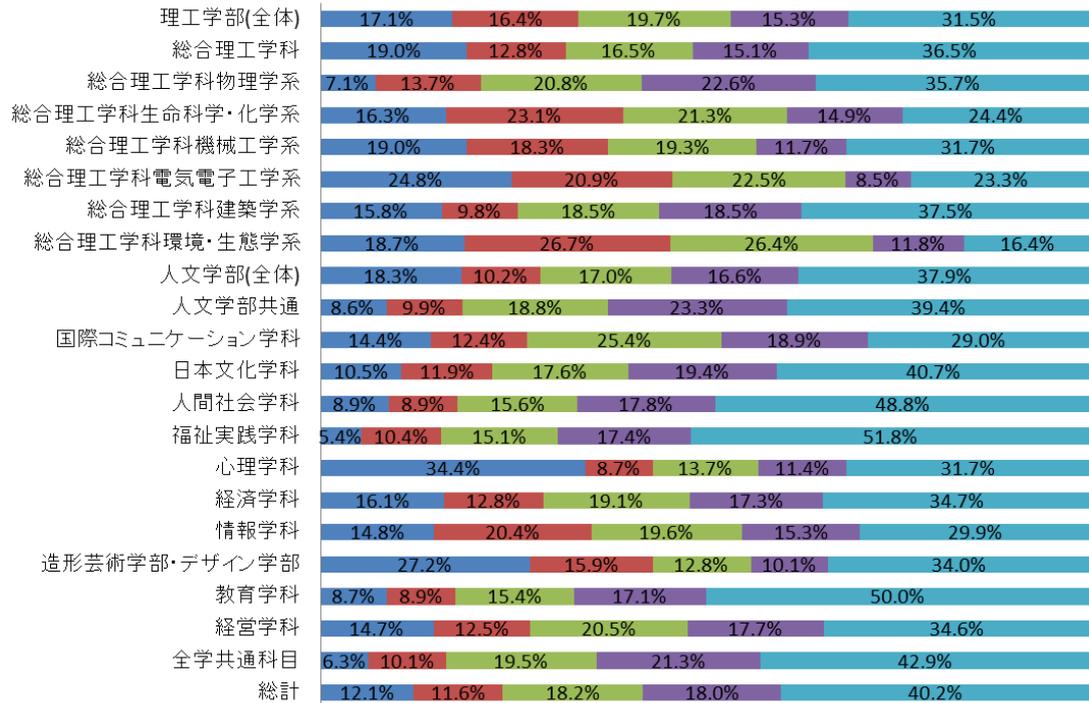
※グラフは 回答者数に対する比率

- a. 授業の内容を確認するため
- b. 授業の到達目標を知るため
- c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため
- e. 活用しなかった



Q4. あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか？

■ a. 60分以上 ■ b. 60分未満 ■ c. 30分未満 ■ d. 15分未満 ■ e. 全くしなかった



3. 2015（平成27）年度 授業アンケート結果の概要

1) 全学の総評

2) 理工学部

- ①学部長による総評
- ②総合理工学科 物理学系
- ③総合理工学科 生命科学・化学系
- ④総合理工学科 機械工学系
- ⑤総合理工学科 電気電子工学系
- ⑥総合理工学科 建築学系
- ⑦総合理工学科 環境・生態学系

3) 人文学部

- ①学部長による総評
- ②国際コミュニケーション学科
- ③日本文化学科
- ④人間社会学科
- ⑤福祉実践学科
- ⑥心理学科

4) 経済学部

- ①学部長による総評
- ②経済学科

5) 情報学部

- ①学部長による総評
- ②情報学科

6) 教育学部

- ①学部長による総評

7) 経営学部

- ①学部長による総評

8) デザイン学部

- ①学部長による総評

9) 全学共通教育委員会

- ①全学共通教育 委員長による総評

2015（平成27）年度 学生による授業アンケート結果の概要

1) 全学

全学の総評（前期）

以下に、2015年度前期に実施した授業アンケート結果の全学的傾向について総評する。
最初に大学全体の平均値に着目すると、以下のような傾向が認められる。

- (1) 質問1の「授業内容の理解」に関しては、「よく理解できた」(32.8%)と「まあまあ理解できた」(48.8%)を合わせると81.6%強となり、かなり高い数値になっている。これは例年通りの傾向が継続していることを意味しており、授業の理解度に関しては一定の成果が上がっていると言える。
- (2) 質問2の「授業の良かったところ」に関しては回答項目にばらつきが見られるが、「授業の内容」が34.2%で最も高い値となっており、以下「機材・資料・板書」(21.8%)、「教員とのコミュニケーション」(21.6%)と続いている。「授業の内容」と「教員とのコミュニケーション」の両項目が比較的高い数値になっていることを見ると、授業に関する受講生の満足度は一定の水準にあると理解できるが、本来であれば「授業の内容」がより高い数値にならなければならないとも言える。
- (3) 質問3の「シラバスの活用」は、「活用しなかった」が41.3%と最も高い回答率になっており、例年通りの傾向に歯止めがかかっていない状況が窺える。「シラバスの活用」は学生の学修意欲の一つの指標であると捉えると、より積極的な活用を促す対策が求められる。
- (4) 質問4の「予習・復習」に関しても、例年と同じ傾向が表れている。即ち、「全くしなかった」(44.8%)と「15分未満」(18.5%)を合わせると63%強になり、これはほとんど自習をしていない学生が圧倒的多数であることを意味している。より主体的な学修が求められている今日、学生により多くの自習時間を促すような授業運営や履修基準を構築することが急務であると言える。

以上、大学全体の傾向を見ると、授業への理解度や満足度は概ね良好であるが、一方で本学の学生が変わらず消極的な学修姿勢に留まっていることが分かる。近年大学に求められている課題発見能力や課題解決能力等々の養成を実現するには、学生の積極的かつ主体的な学修態度の涵養が必須であると言えるが、これはすでに数年前から突き付けられた課題である。この課題を解決するには、すでに上で述べたが、大学全体としては履修基準の再構築、学部学科の現場レベルでは授業運営の工夫などの対応が求められる。

次に、大学全体の傾向と若干異なる傾向を示している学科・学系別（全学共通教育を含む）の回答結果について概観すると、以下のことが分かった。

- (イ) 質問1に関して「あまり理解できなかった」と「全く理解できなかった」の合計が大学全体の平均値より若干高くなっているのは、物理学系、機械工学系、国際コミュニケーション学科、経済学科ならびに情報学科である。他の学科・学系も含め、「あまり理解できなかった」と「全く理解できなかった」の理由がどこにあるのかについて分析する必要がある。
- (ロ) 質問3で「活用しなかった」の回答が大学全体の平均値より比較的高くなっているのは、建築学系、福祉実践学科、心理学科ならびに教育学科である。これは昨年度と同様、資格取得を目指す学科・学系に見られる傾向である。一方でデザイン学科と日本文化学科の「授業の内容を確認するため」が、それぞれ44.6%と40.0%と平均値を大きくこえている結果は、幅広い知識と教養の修得を教育の軸に据えている学科の傾向であり、教育目標の違いによってシラバス活用の在りかたが異なることを示している。いずれにしても、引き続きシラバスの有効活用を促す対策が求められる。
- (ハ) 質問4で予習・復習を「全くしなかった」と「15分未満」の合計が約70%をこえているのは、総合理工学科(72.2%)、人間社会学(72.5%)、福祉実践学(69.8%)ならびに全学共通科目(70.0%)である。一方で、「60分以上」と「60分未満」の合計が35%以上と比較的高かったのは、生命科学・化学系(40.0%)、環境・生態学系(36.9%)ならびに心理学科(39.7%)である。主体的

学修時間が大学全体として一様に低い傾向を示している中であって、学修時間がより長い学生の率が若干でも高い学科の事例を参考にすることで、大学全体として主体的学修時間を増加させるための方策を探ることが求められる。

以上、前期の授業アンケート結果に関する大学全体の傾向を確認した。なお、それぞれの学科・学系、あるいは教員各個が独自の質問項目を立てることによって、FD活動により実効性のある授業アンケートを実施することも併せて求められる。

(全学FD委員会委員長 服部 裕)

全学の総評(後期)

まずアンケート結果を大学全体の平均値で捉えると、以下のような傾向が顕著に認められる。

- (1) 質問1の「授業内容の理解」に関しては、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」を合わせると81.8%という高い数値になり、前期とほぼ同様の結果となっている。
- (2) 質問3の「シラバスの活用」に関しては、41.2%が「活用しなかった」をマークし、前期及び昨年度と同じように本質問に対する最も高い回答率となっているばかりか、前期の39%を若干上回る悪い結果になっている。
- (3) 質問4の「予習・復習の程度」に関しては、「全くしなかった」が前期と同じように42.0%と圧倒的に高い値であり、また「15分未満」の19%と合わせると、事実上予習・復習を行っていない受講生は60.8%となる。これは、前期の62.5%に比べると微減ではあるが、作年度と同様に本質的な改善の傾向は認められない。

以上のことから、後期の授業アンケート結果は前期のそれとほぼ同じ傾向を示していることがわかる。つまり、授業への理解度は概ね良好ではあるが、シラバスの活用が未だに浸透していないことと、ほとんどの受講生が予習・復習を行っていないという事実である。このことは、学士課程教育の質の向上のために求められる受講生のより積極的な学修態度が未だに身につけていないことを示している。こうした傾向を改善するためには、学生の主体的な学修を促すシラバスや成績評価のあり方などを確立する必要がある。

その他の質問項目に関する学科・学系別の回答は、ほぼ前期の結果と同じ傾向にある。

以上の傾向のなか、前期と同様に「60分以上の予習・復習」と「60分未満の予習・復習」の合計が環境・生態学系では51.3%、心理学科では36.3%と比較的高い値になっている。両学科・学系の取り組みは、学生により多くの主体的学修時間を促す参考になるものと思われる。

(全学FD委員会委員長 服部 裕)

2)理工学部

① 理工学部長による総評

授業内容の理解度を理工学部と全学とを比較すると、理解できなかったとする学生の割合が若干高い傾向にあるが、おおよそでは同じであるように見える。また、昨年度の結果と比較すると、「良く理解できた」と「まあまあ理解できた」とする学生の割合は増加しており、教員による授業内容の改善の努力の結果と見ることができるかも知れない。

理工学部において各学系の回答において「あまり理解できなかった」の回答に着目すると、その割合は前後期の中で、11%台から 26%台までと大きな幅が存在する。「あまり理解できなかった」と回答している学生は授業についていくことができている可能性があるので、要注意であろう。教員は各自担当科目のアンケート結果を踏まえて、適宜、講義で基礎的な内容を組み込む必要があるかも知れない。

授業の良かった点では、全学の総計と比較すると、「機材・資料・板書」の割合がやや高く、「教員とのコミュニケーション」の割合はやや低いという結果は昨年度と同じ傾向にある。教員とのコミュニケーションは学生の理解度を高めると考えられるので、講義のあとなどに学生とのコミュニケーションを図る機会をつくるなどの工夫をすると良いように思われる。

シラバスを活用しなかった学生と予習・復習を全くしなかった学生は、全学、理工学部で同じように多数存在しているという結果は昨年度と同じである。シラバスを見ていないことは、予習・復習を全くしないことに関連しているように思われる。教員は講義の中でシラバスを提示し、授業科目の到達目標や授業計画についても触れ、学生に対して自主的な学習を促すことが必要のようである。

ここで開示されたアンケート結果は、学部、学系の概観に過ぎないので、各教員は担当科目の結果を検討することはもとより、学系内において自由記述を含めたアンケート内容を精査して、授業改善に役立てていくべきであろう。

最後に、昨年度のアンケート結果においても感じたことであるが、理工学部全体のアンケートの回答数は前期 4,509、後期 2,689 であり、理工学部の在籍学生数と学部内の開講科目数から考えて、アンケート回答率が極めて低いことが伺える。アンケート結果を授業改善に役立てて行くためには、多くの学生に回答してもらうことが大前提であるので、授業アンケートの方法について検討する必要があるように思われる。

(理工学部長 清水光弘)

② 理工学部 総合理工学科 物理学系による総評

本アンケート Q1 で「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の合計が前期、後期では昨年度と比べてそれぞれ 73.6%⇒75.6%、74.4%⇒68.7%と変化しているが、これらは有意な差ではなく、十分な結果であろう。しかし、それが本物の理解に値しているかは疑問ではあるが、それに加え、Q2 の「授業の良かった点」に関しては、今年度の回答者の半数以上が「授業の内容が良かった」と回答しているのは好ましい。一方、物理学系だけにとどまらないが、シラバスを活用していない学生が昨年度に引き続き多いのは、学生の責任だけでなく、教員の作製したシラバスの内容に不十分な点があり、「授業の内容の説明」や「授業の到達目標」などの記述が、シラバスの必要性を十分伝達するに至っていない様であり、改善していく必要がある。

③ 理工学部 総合理工学科 生命科学・化学系による総評

Q1「授業内容の理解」に関しては、ある程度理解できたと認識した学生が前期、後期それぞれ 79.8%、76.9%であった。80%には近づいているものの、理解が不十分な学生に対して基礎学力を習得させる効果的な対策が必要と考えられる。各教員により、授業の進め方に違いはあるものの、細目に演習問題を行い、計算力を中心とした理解度を定着できるよう工夫も必要である。Q2「授業の良かった点」に関しては、授業内容の評価の割合が高いものの、教員とのコミュニケーションの割合が他学系より低いのが気になる。主観的な要素もあるが、この点に留意して授業を進めていきたい。シラバスの利用については、活用しない学生が約 38%いる。初回の授業において、シラバスの内容に相当する授業概要、成績評価方法などに関して、各教員が説明しているが、あまりに高い低い割合である。Q4「予習・復習時間」に関しては、60分以上の割合が前・後期それぞれ 23%、17%となっており、後期になって学習時間が減少している。前期を終了

して、気の緩みが出た可能性がある。全く予習・復習しなかった割合が前期から後期にかけて、29% から24%と多少減少したことは評価したいが、約1/4の学生が学外において勉強しないのは憂慮すべきことである。この事実を認識して授業を進め、各学生の指導にあたる必要がある。

④ 理工学部 総合理工学科 機械工学系による総評

Q1「授業内容の理解度」に関しては、よく理解できたとまあまあ理解できたを合わせると前期74.4%、後期83.7%(昨年 前期77.3%、後期79.5%)となっている。約20%の学生が理解出来ていないことになっており、引き続き工夫が必要となる。また、昨年よりは、理解度があがっているため、引き続き努力が必要である。

Q2「授業の良かった点」(複数選択、回答者に対する比率)に関しては、複数回答で「機材・資料・板書」が良かったと回答した人は前期45.8%、後期54.0%(昨年 前期42.8%、後期51.4%)、「教員とのコミュニケーション」が良かったと回答した人は前期37.0%、後期36.7%(昨年 前期42.6%、後期40.6%)、「授業の内容」が良かったと回答した人は前期41.0%、後期43.3%(昨年 前期43.1%、後期43.9%)となった。特に「機材・資料・板書」については、大学全体では、前後期とも約30%であるため、教員の努力はあるものの、引き続き理解度を上げるように工夫が必要となる。また、昨年との比較では、「機材・資料・板書」では、少しあがっているが「教員とのコミュニケーション」が下がっているため、引き続き工夫が必要となった。

Q3「シラバスの活用」に関しては、「活用しなかった」と回答した人が前期28.9%、後期43.2%(昨年 前期29.5%、後期34.9%)となり、特に後期では、数値が高くなってきており、昨年以上に教員からシラバスの活用を促す必要がある。

Q4「予習・復習の時間」に関しては、30分以上予習・復習している人が前期27.13%、後期37.3%(昨年 前期31.6%、後期31.6%)となっており、昨年同様約70%の人がほとんど授業以外に勉強していないことになっており、特に復習ができるようなノートの整理や宿題を出題することにより、より理解度を高めるような努力が必要となる。

また、機械工学系では、教育FDを7月末に開催しており、専任と非常勤全員で、良い授業を行うための方策について、今後もFDを通して本学での教育の特徴を考え、さらに、専任と非常勤との連携により共同して、引き続き努力する。

⑤ 理工学部 総合理工学科 電気電子工学系による総評

平成27年度は前年に引き続き「問題の本質を考えるスタイルの講義」を重点的に行った。同時に複数の科目で担当教員を変更することで、講義のわかりやすさの観点からレベルアップを図った。この結果が(1)授業の内容・資料等の評価、(2)授業理解度の評価、の観点でいずれも昨年度と比較して10ポイント以上の向上というアンケート結果につながったと推測している。一方アンケートに回答した学生に関し、十分な予習復習を行っている学生は前期、後期とも全体の半数以下という結果となっていることから、教員側から十分な予習復習を行うことの重要性を今後積極的に発信することで、学生の更なるレベルアップが期待できると考えている。引き続き、学生の学習意欲を高め、今後の講義内容の理解度アップにつながるように、適宜教員の担当科目の適正配置を行い、学生の意欲を向上させるよう教員側でも意識をしていく。

⑥ 理工学部 総合理工学科 建築学系による総評

授業理解度を問うQ1.で、「理解できた」部類を足した比率は、昨年は前後期とも本学系において9割に近く、全学の中でも上位(前期1位、後期2位)に属していたが、今回は前期87.8%、後期83.6%で上位(前期3位、後期6位)ではあるものの若干低めとなった。他学部が躍進してきていることも原因といえる。授業の良かった点を尋ねるQ2.で、教員とのコミュニケーションについては上位にあり、授業の内容については前期46.6%、後期50.6%と昨年から数パーセントのダウンとなっているが、全般的に授業アンケートの本学系の平均評価は、昨年同様全学平均を上回るか同等であった。このことから本学系の授業レベルが継続的に一定の質を保っていると考えられることができる。なお、Q2.で教員とのコミュニケーションについて、意匠系専任教員1名の海外研修の影響と昨年原因を考察されたが特段の変化がないことから、個々の講義でのアンケート結果について各教員の精査も必要である。シラバスの活用について問うQ3.でまったく活用しない学生の比率が昨年に引き続き全学の平均レベルと同等で必ずしも十分でない。初回授業で講

義内容の十分な説明をすれば、学生の必要とするシラバスの内容、および本アンケートの質問事項について再考が必要であろう。

⑦ 理工学部 総合理工学科 環境・生態学系による総評

講義内容の理解度をみると、前期、後期ともに理解できたと答えた割合が80%程度となっている。ただ、「まあまあ理解できた」という曖昧な答が一番多く、自信を持って理解できたという割合は20%程度にとどまっている。学生が自信をもって「理解できた」と答えるように、理解度を高める工夫が必要である。講義を評価する点としては、「機材・資料・板書」、「授業内容」となっている。理解度を高める道具として機器設備や資料を活用しているが、教員とのコミュニケーションを高める必要がある。シラバスの活用については、「講義内容を確認するため」、「評価基準を参照するため」が高い。JABEE運用の中で、学系の学習・教育到達目標の達成度評価を実施しており、そのことが評価基準を参照するということにつながっていると思われる。予習、復習に関しては、50%以下が「60分未満」となっており、「15分未満」と「全くしなかった」をあわせると35%ほどいる。学系の各講義シラバスには、予習復習をしてくるよう明記してあるが、実際には半数ほどしか十分に取組んでいない。課題を充実させるなどの工夫が必要である。

3) 人文学部

① 人文学部長による総評

設問1「授業内容の理解」について、選択肢「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」との選択率を合算した値は、人文学部全体について、前期は84.4%、後期は84%である。このことは、本学部における授業の難度がほぼ適正な水準にあることを示していると言えよう。

設問2「授業のよかった点」については、本学部の5学科の専門性がそれぞれ異なるので、全学科で共通の選択肢の選択率を高める努力が必要であるとは言えない。(例えば、「教員とのコミュニケーション」が教育上の重点を占める学科もあれば、そうではない学科もある。また、「教員とのコミュニケーション」が、学生にとっていかなる意味で理解されているかも、学生間で様ではないと考えられる。)

設問3「シラバスの活用」について、「シラバスを活用しなかった」とする回答は、学科による相違はあれ、人文学部全体について、前期は35.8%、後期は35.9%である。これは、「シラバスを読んだ上で履修登録する」という基本的なルールが3分の1を超える学生に遵守されていないという事態であり、早急に抜本的な対策が求められる。このため、(1)前期開始前の履修ガイダンスへの出席を強く指導し、(2)シラバスが学生各自が自律的に履修計画を立てる上で不可欠の重要な情報を含んでいることをさらに周知し、(3)シラバスの配付・公開から履修登録まで、シラバスを読むのに十分な時間的猶予を学生に与えること等が求められよう。(3)に関して、平成28年度の新入生については、「自立と体験1」の授業コマが履修登録当日になるまでわからなかった事態は改善された。このことによって、シラバスを読むための時間的猶予が生じることを期待している。

在学生に対しては、シラバス公開から履修登録まで十分な時間が確保されている。全学共通科目についてシラバスを活用しなかった学生は前期24%、後期32.2%であるのに対して、学科科目についてシラバス活用が低調である(学科によっては49.5%が全く活用していない)のは、選択の可能性が大きい全学共通科目はシラバスを読んだ上で履修するが、学科科目については必修科目が多く、事実上履修する科目が決まっているため、シラバスを読んでも読まなくても履修はしなければならないという事情があるものと思われる。しかしながら、必修科目であればなおさら、科目の目的や評価基準について理解した上で授業に臨むことが重要であるから、シラバス活用の重要性は、今後もさらに学生に周知し続けなければならない。

設問4「1回の授業当たりの予習・復習時間」について、「60分以上」の予習・復習を行っていると回答した率が際立って高い(前期・後期とも30%を超えている)のは、心理学科の学生であるが、このことには必修科目として2年生に配置されている実習科目で課されるレポート作成が寄与しているものと推定される。学科ごとの専門性や科目の性格に応じて異なるが、自主学習が当該科目の教育目標の達成に不可欠である科目においては、適切に自主学習が行われるように丁寧に指導を行う必要がある。

学生による自由記述を概観したところ、その内容は2種類に大別できた。即ち、「負担が強すぎる(大意)」、「もっと面白い授業をしてほしい(大意)」といった、(1)教育内容・教育方法に関するものと、「授業開始が毎回15分遅いのは困る(大意)」、「板書の字が読めません(大意)」といった(2)授業の技術面に関するものである。(1)については、「個々の科目の教育内容・教育方法は、(a)カリキュラムとの関係として、(b)教員の責任において決まる」から、教員は安易にそのような要求に迎合する必要はない。(例えば、負担と感しながらも真摯に努力しなければ目的を達し得ない科目もある。また、授業はただ面白ければ良いというものではないし、「面白さ」の基準は人によって異なる。)しかし、(2)については、議論の余地なく直ちに改善すべきである。教員各位にあっては、授業アンケートは元来、教員による自主的な授業改善のための気づきの機会として実施されていることを再確認いただきたい。

(人文学部長 境 敦史)

② 人文学部 国際コミュニケーション学科による総評

昨年度に続き、設問1の授業理解度については、「よく理解できた」、「まあまあ理解できた」と答えた学生が前期90%、後期94%と高く、昨年度に引き続き全学部学科の中で最も高い数値であった。とくに「よく理解できた」と答えた学生が前期52.7%、後期66.4%と、全学部全学科の中で最も高い数値であった。これは、ここ数年来力を入れているアクティブラーニングへの積極的なシフトの結果であろうと考えられる。また、設問2の授業の良かった点については、「教員とのコミュニケーション」を1番の理由に挙げた学生

が多かった（前期 36%、後期 39%）。これも全学部学科の中で最も高い数字であるが、1 年次から担任制を取り入れ、学生の履修状況を確認し、アドバイスする体制を構築したことの反映と考えられる。また少人数制の語学クラス、さらにフィールドワークなどの体験学習の機会を増やしたことも、この高い数字の背景にあると考えられる。

一方、設問 4 の予習・復習の時間については、相変わらず 7 割強（前期 73%、後期 74%）の学生が 30 分以下となっている。自学自習の習慣化を図るためには、予習・復習を目に見える形で確認する方法（例えば、理解度確認テストなど）を検討する必要があるのかもしれない。

③ 人文学部 日本文化学科による総評

例年同様、授業に対する学生の評価は総体に良好であり、これは教員側の抱く感想とも一致する結果である。

学科の特質もあってか、学生の評価は「授業内容への興味」が主体であるが、

同時に、教員の人間性と直に触れ合いたい者が多く、

これは日ごろ、当学科独自の「研究会活動」など、多角的に十二分に補い得ているものと分析する。

日常の学習習慣が充分ではない学生が少なくない点（全学部全学科でほぼ中位）、今後検討を要する。

年ごとにレベル・アップする（ように思われる）学生の質を、卒業までどこまで保持し研磨できるか。

われわれ学科教員の鼎の軽重が問われる一大事がここに存するであろうと、改めて思い致された。

④ 人文学部 人間社会学科による総評

『授業内容の理解』については、「理解できた」（「よく理解できた」＋「まあまあ理解できた」）と回答した学生は、前期 86.0%（H26 年度 82.2%）、後期 78.6%（同 83.9%）で、前年度に比べて、前期は増加したものの、後期は減少している。これは、平成 26 年度より新教育課程に移行し、27 年度よりスタートした専門科目において、前期に基礎科目、後期に応用科目が開講されていることが影響を与えた可能性が考えられる。また『授業の良かった点』については、「授業内容そのものが良かった」と回答した学生は、前期 47.2%（同 50.8%）、後期 50.1%（同 56.4%）と、前年度に比べ前・後期とも若干減少している。新教育課程移行に伴う授業内容変更の影響なのかを、今後見極めていく必要があるだろう。『シラバス活用』については、「授業内容確認」と回答した学生が、前・後期ともに 4 割弱いる一方で、「活用しなかった」学生も、前・後期ともに 4 割前後見られた。また、「授業の到達目標を知る」については、前・後期とも 1 割程度と少なく、ディプロマ・ポリシーにつながる学生の学習効果を高めるためにも、受講にあたって、シラバスの内容をきちんと確認するよう学生に指導していく必要がある。『授業の予習・復習』については、「予習・復習をまったくしなかった」学生は、前期 57.5%（同 42.7%）、後期 48.8%（同 50.8%）と依然多い状況にある。科目により予習・復習の必要度に違いがあるものの、予習・復習をすることによる授業理解度の向上など、学習意欲や学習効果にも影響を及ぼすと考えられるので、引き続き、学生に周知徹底させていく必要がある。

（*前年度との比較については、調査対象科目や調査対象学生が異なるので、解釈には注意が必要であると考えるが、学科に所属する学生の全体的な傾向としてとらえ解釈した。）

⑤ 人文学部 福祉実践学科による総評

① シラバスの活用の不徹底

昨年と同様、未だにシラバスの活用が十分になされておらず、むしろ悪化している感がある。ウェブサイトで見られる形態であるにも係わらず、学生がほとんどシラバスを参照していないことが判る。印字したシラバスの配布には賛否があるが、少なくとも学科科目についてはそれぞれの授業時に、教員がシラバスを印字配布することを検討したい。またガイダンス時期（特に新生に向けて）にシラバス参照を徹底して指導しなければならない。

② 予習復習に割く時間の不足への対応

これも前年度に引き続き懸案となっている。学生に 1 日の授業以外の予定を聞くと、大方がボランティアや部活動のほか、アルバイトに相当の時間を費やしている。このような状況でいかに授業に向けての予習・

復習の時間を増やすよう指導するかが課題である。具体的な課題の指示と、そのチェック体制を構築するなど、学科を挙げて具体的に策を講じる必要がある。

③ 授業全般について

昨年と同様、授業態度は出席率にも示されるように総じて良いと考えられる。また教員とのコミュニケーションも総じて良好といえる。授業の理解度についても、専門科目は学科規模を反映して受講者の数が多いすぎることがないため、授業進度に大方の学生がついていっている。だが「内容を理解していない」と答えている学生が一定の割合いることは問題である。今後、そのような学生の個別指導について検討を重ねる必要がある。

⑥ 人文学部 心理学科による総評

「授業内容の理解」にしては、「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせて、80%以上の学生が理解できたと回答していた（前期 84.2%，後期 83.7%）。

「授業で良かった点」に関しては、「授業の内容」が最も多かった（前期 37.1%，後期 37.4%）。次いで、「機材・資料・板書」（前期 27.8%，後期 26.2%）、「教員とのコミュニケーション」（前期 17.0%，後期 19.0%）多かった。

シラバスの活用法に関しては、「活用しなかった」が最も多く（前期 44.0%，後期 42.5%）、次いで、「授業に内容を確認するため」が多かった（前期 32.6%，後期 29.6%）。

「予習・復習の程度」に関しては、前期で「全くしなかった」が最も多く（33.0%）、後期で「60分以上」が最も多かった（34.4%）。

以上の結果は、昨年度と大差なく、全体的に、学生は、授業内容をほぼ理解しているが、シラバスは有効に活用できていないこと、予習・復習などの自律的な学習をしていないことにあまり変化はないと言える。これらの傾向は、全学的な傾向とほぼ同じであり、学生が、授業内容と自分の興味関心との整合性を検討する上でシラバスを有効に活用し、主体的な学習を進めるための指導が必要であることを示唆している。

4) 経済学部

① 経済学部長による総評

授業アンケート集計結果に関する分析については、学部長としても基本的には学科主任とほぼ同様の見方をしている。

授業アンケートに回答した学生からは、学部教員の授業内容・学生対応など全ての項目について、おおむね良好な評価を得ている。授業の進め方の改善や講義内容のいっそうの充実に向け、各教員が授業改善に積極的に取り組んでいることが良好な結果につながっているものと思われる。

しかし、最大の問題は授業アンケートの回答率が他学部と比較しても極めて低いという点である（回答率 10～30%程度）。経済学部では、非常勤教員を除く全教員から自らの点検結果を学科主任および学部長に報告してもらっているが、多くの教員がこの点を最大の問題としていることに照らすと、回答率の低さはいかに教員の指導力不足に起因しているとも言えない。

教員によっては、下記のような指摘をしていた教員もいる、ということを付記しておく。

①最終講義時に自らの目の前で学生たちに作業を指示したのにも関わらず、この回答率の低さは理解に苦しむ。何らかのシステムミスなのではないか。②現行の方式では回答率のアップはこれ以上望めない。従来の紙媒体方式に戻すべきである。③回答率アップするには、授業中にガイダンス時のように「授業評価画面」を映し出し、逐次解答させなければならないのではないか。

回答率が極めて低いままでは有用な回答は導出できず、いかなる方式がベストなのか、真摯に再検討すべきものと思われる。

(経済学部長 坂本秀夫)

② 経済学部 経済学科による総評

経済学部の集計結果は以下の通りである。授業内容の理解については約 75%が理解できたと回答している。授業の良かった点では、教材・板書、教員とのコミュニケーション、授業の内容で約 78%の良好な評価を得ている。シラバスの活用については約 73%が活用したと回答している。予習・復習についても約 65%が行ったとしている。全学アンケートや、経済学部独自のアンケート結果を受け、各教員が授業改善を行っている結果が出始めてきていると評価できる。

アンケート結果を受け各教員が授業改善に努力しているため、その結果として、学生からの評価、要望・指摘が明確なものになりつつある。そのため、各教員の授業改善への今後の課題が、具体的なものとして提起されている。授業の進め方について、説明の仕方、声の調子、板書の在り方、授業の間のとり方等が課題として提示され、講義内容についても、学生の状況を踏まえた講義内容への改善とさらなる講義内容の充実等に向けての具体的な取り組みが提示されている。

残念なことは、アンケート回答率の低さ（他学部と比較しても低い）である。経済学部としても、各教員がアンケート回答時間を設定するなどアンケート回答率を上げる努力を行っているが、成果はみられないため、学科の課題として残っている。

5)情報学部

① 情報学部長による総評

前年度（2014年度）と比較し、回答数（のべ回答者数）が減少した。2014年度は前期が1527名、後期が1074名と、計2601名が回答した。対して2015年度は前期が1241名、後期が1192名と、計2433名の回答であった。授業科目ごとの回答率（登録者数に対する回答者数の比率）を後期について調べると、卒業研究などを除いた74科目中70%以上となるのはわずか4科目であり、50%以上でも8科目しかない。授業内でアンケート回答時間を設けるといった方策を講じてはいるが、十分な時間が取れなかったり、Webアンケートのため回答を後回しにされたり、といった状況が推察される。授業時間内に実施してもアンケートの性質上教員が机間巡回できないといった事情や、教員の努力にも関わらず前年度より悪化しているといった事実から、実施方法の根本的な見直しが必要であると思われる。

低回答率のため信頼性には乏しいかもしれないが、設問ごとに前年度と比較してみる。

Q1の授業内容の理解度については、大きな違いは見られない。前後期合計で見ると、「よく理解できた」が前年度19.3%から今年度21.1%に増加し、「まあまあ理解できた」も51.8%から52.5%へと増加している。一方で「あまり理解できなかった」は20.9%から18.7%へ、「全く理解できなかった」は8.1%から7.6%へと減少している。わずかではあるが、理解しているという比率が増加しており、良い傾向であるといえる。しかしながら、理解できなかったという消極的な回答が合わせて25%程度あり、すなわち四人に一人は理解が不十分であると自己評価しており、授業改善の余地がまだまだ残されている。

Q2の授業の良かった点については、「機材・資料・板書」が32.4%から29.4%へと、「受講者の数」が12.1%から9.9%へと、それぞれ減少した。逆に「授業の内容」は45.8%から46.7%へと微増した。機材の老朽化により、故障率が高くなったり、動作速度への不満が出てきたりしているのかもしれない。「受講者の数」については、とくに1年次の学生数が2015年度は増えたためと考えられ、適切なクラス数を検討できるようにしなければならない。

Q3のシラバスの活用については、「授業の到達目標を知るため」が11.1%から14.6%へ、「予習・復習に役立てるため」が5.2%から8.0%へ、「評価基準を知るため」が22.9%から25.2%へと、それぞれ増加している。これらは学習意欲の向上の現れであると考えられる。「活用しなかった」が41.4%から38.3%へと減少していることから、シラバスを学修に役立てようとする意識が徐々に浸透してきていると考えられ、望ましい傾向であるといえる。一方で、「授業の内容を確認するため」は36.2%から33.4%へと減少している。これは、LMS(Learning Management System)を活用した授業が増え、シラバスよりも詳細な情報が得られるようになってきているためかもしれない。

Q4の予習・復習時間についても、良い傾向が見られる。「全くしなかった」が41.2%から35.8%へ、「15分未満」が16.0%から15.5%へと、それぞれ減少しているのに対し、「30分未満」が15.9%から18.9%へ、「60分未満」が14.6%から17.0%へ、「60分以上」が12.3%から12.9%へと、それぞれ増加している。増加傾向にあるとはいえ、まだまだ十分であるとは言えず、授業時間以外での学習時間を今後もより増加するよう促進していきたい。

Q5では授業改善に向けた提案などを求める自由記述の設問が設定されている。回答として寄せられた学生の声から特徴的なものを以下にまとめる。

授業内演習に対してのコメントが多く、評価する声がある一方で、演習量が少ないといった不満や、解説・解答の充実を求める声もあった。情報学科の科目は演習形式の科目や実験科目が多く、当然の結果であろう。講義形式の授業では必然的に時間外での演習が求められるが、学生にはその意識が低いという理由もあるかもしれない。ただし講義科目でも、LMSを用いた資料の事前配布が予習に役立った、といった意識の高い学生からの声も寄せられている。

演習や実験の課題内容について、高評価のコメントが散見された。作品や、プログラム、Webアプリ等の作成課題に対し、高い満足度が得られているようだ。

その他、グループワークでの評価方法に対する不公平感や、複数クラス科目での授業内容や評価基準の相違に対する不満の声が見られた。

(情報学部長 篠原 聡)

② 情報学部 情報学科による総評

設問1「授業理解」に関しては、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の合計は、前期72.9%、後期74.4%となっている。学生は学科の授業をある程度以上理解していると思われる。この割合は昨年度より改善されているが、大学全体としては多くの学科で80%以上の学生が授業の内容をある程度理解していることから、授業内容の理解をより深めるための工夫の余地はまだあるといえる。

設問2「授業のよい点」については、「授業内容」を選択する学生が最も多く、前期の授業内容を評価する学生の割合は昨年度より増加した。各教員が授業の改善に取り組んでいる成果が現れてきているように思われる。

設問3「シラバス」については、「活用しなかった」を選択する学生の割合が改善されている。後期には「活用しなかった」とする学生は昨年度より約14%減少した。シラバスを活用する学生の割合は改善されているが、シラバスの内容や構成、電子シラバスの操作性や可読性について検討を要すると思われる。

設問4「予習・復習の程度」については、「全くしなかった」とする学生の割合は昨年度より改善されている。今年度の後期は、前期に比べ約12%改善された。しかし、授業の予習・復習をしていない学生の割合は3割を超えており、日々の自学自習の時間を確保するよう、授業やガイダンスを通して周知徹底させていく必要がある。

授業内容の理解度は比較的高く、授業のよい点として内容を最も評価する学生は多いが、授業の予習・復習をする学生は少ない。学生の学習意欲を高め、自律的・主体的な学びへと導くよう授業を改善していくことが引き続き課題となるであろう。

6)教育学部

① 教育学部長による総評

昨年度と同じアンケート内容に対して、同じ傾向の回答が寄せられたことが集計結果から読み取れる。すなわち、授業内容と教員とのコミュニケーションの良さが、授業内容の理解について肯定的な回答につながっている。加えて、シラバスを活用せず、自主的な学びには殆ど時間を割かないことも、昨年と同様である。こうした結果は、現在の授業アンケートが、学生の自律的で深化した学びに結びつく授業運営を各教授者が考えるという、本来の目的に対して有効に機能し難いことを示唆している。より実質的な方策の考案が必要な時期と考える。

(教育学部長 富樫 伸)

7)経営学部

① 経営学部長による総評

この評価報告では、経営学部は一学部一学科であり、学部においても学科においても同じような回答になることから、例年と同様に学部兼学科の報告としている。

調査方法は、Web サイトから質問に答える方式になり、回答率は学生の自主性に大きく依存しているように思われる。以下に各質問に関するコメントを示す。

[1:あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか]という設問に関しては、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の合計が、前期 88.2%・後期 85.9%であり、昨年よりも若干低下はしているが、特に問題はないものと思われる。

[2:あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか?]という設問に関しては、前期後期ともに「授業の内容」が前期 34.7%、後期 32.8%と評価が高く、以下、「教員とのコミュニケーション:前期 27.2%、後期 27.4%」、「機材・資料・板書:前期 17.7%、後期 19.8%」となっており、3割強の学生が「授業の内容」を評価の第1位に挙げている。経営学科が重視する理論だけに偏らない経営学の実践的な授業内容が評価されていると思われる。

[3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか?]という設問に関しては、「活用しなかった:前期 40.0%、後期 44.4%」と高く、肝心の「授業の内容を確認するため:前期 31.6%、後期 28.5%」であった。この結果から、シラバスが有効的に活用されていない実態が見えてくる。授業開始時でのガイダンスなどでのシラバスの内容の周知が必要に思われる。

[4. あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか?]という設問に関しては、「全くしなかった:前期 32.1%、後期 34.6%」が最も多く、「30分未満:前期 22.7%、後期 20.5%」が続く、以下、「15分未満:前期 18.2%、後期 17.2%」、「60分未満:前期 13.6%、後期 14.7%」、「60分以上:前期 13.5%、後期 12.5%」という結果である。「全くしなかった」との回答が多いことは危惧されることであり、普段から学生への勉学意識の向上に力を入れる必要があると思われる。

(経営学部長 光成豊明)

8) デザイン学部

① デザイン学部長による総評

当学部の今回の授業アンケートの結果は、デザイン学部の1、2年生と造形芸術学部の3、4年生に対するアンケートの集計である。以下に述べるように、全体的に全学の平均に比べて好ましい結果が得られていると同時に、昨年度に比べてもいくつかの点でかなりの改善が見られた。

その理由の一つは、26年度と27年度の教育環境条件の違いによるものであると思われる。前年度は、造形芸術学部からデザイン学部への改組改編があり、しかも青梅校から日野校への完全移転の直前であったため、1年生は日野校のデザイン学部、2年生は日野校の造形芸術学部、3、4年生は青梅校の造形芸術学部という複雑な状況となった。そのため学年間の学生の交流が不活性となり、専任教員は日野校と青梅校の両方に出講しなければならないので、学生にとっては教員不在の時間が多く、さらに年度後半は日野校への完全移転の準備に追われる等、間接的に学生の学習意欲にとってはマイナスに作用した可能性が高く、授業アンケートでも前期に比べて後期にポイントを落とす結果になった。しかし27年度は完全移転によって再び全学年が同じキャンパスで学べるようになると共に、新校舎(32号館)が誕生し、教育環境が大きく改善されたことが、アンケート結果にも一部影響を与えていると推測できる。

Q1 授業理解度：

「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせた数字は、前期と後期の平均をとると、前年度は83%であったが、今年度は86%と好転している。またこの数字は全学平均の82%と比べても若干高いものとなった。特にデザイン学部の2年生の科目は、これまでに比べても難易度の高い内容であるにも関わらず理解度のポイントが上がったことは注目に値する。これは教員間のコミュニケーション、意見交換をこれまで以上に徹底し、より細やかな教案を作成して授業を運営した結果が表れたものと考えられる。また、デザイン学部になって造形芸術学部時代に比べて入学志願者数が大きく伸びたため、実際にこれまでよりも学習意欲や理解力の高い学生の割合が増えてきているものと思われる。

Q2 授業の良かった点：

選択肢の中で最も重要な項目と言える「授業の内容」を「授業の良かった点」に選んだ学生は、前期後期の平均では54%であり、全学平均の47%に比べて高いと言える。ただしこの数字に関しては、前年度の56%に比べて若干ではあるが落ちているので、授業内容について今後さらなる精査を行なっていきたい。

Q3 シラバスの活用：

「活用しなかった」と回答した学生が、前期後期の平均で前年度35%であったのに対して、今年度は28%とかなり改善された。また全学の平均が41%であることを考えると、当学部ではシラバスが比較的しっかりと活用されていることが分かる。

しかし一方で、この回答にはいささか疑問が残る。当学部では教員に、第1回目の授業で必ず履修者にプリントしたシラバスを配付して授業内容の説明するよう依頼し実施しているので、学生がシラバスを全く見ていないということは基本的に考えにくい。またそれ以前の問題として、大学のシラバスは、1科目1ページで文字制限もあるので、毎回の授業内容にしても十分な記載はできない。つまり現在のシラバスは履修登録の際に参照する以外に「活用する」ほどの情報はほとんどない。むしろ授業では、これを補うために各教員が独自に授業内容のレジメを用意することが多く、学生はそれを活用しているので、質問項目そのものが、あまり意味をなしていないと思われる。

Q4 1回あたりの授業に対する予習・復習：

「60分以上の予習・復習をした」と回答した学生は、前年度18%であったのに対し、今年度は22%に改善された。全学の平均は11%であり、それに比べてかなり高いと言える。また「しなかった」と回答した学生に関しても前年度の46%に対して今年度は38%に改善され、全学平均の42%よりも低い数字であった。

ただし、この質問項目にも疑問がある。当学部の科目は実技主体なので、一般的な意味での予習・復習という言葉は馴染まないが、実際の課題制作の多くは授業時間外に行なうしかなく、学生たちは翌週までにそれなりの時間を要して課題を進めて次の授業に臨んでいる。そこでは必然的に授業で言われたことを振り返る(復習)必要があるし、毎回次の授業に向けて準備(予習)をしていることになる。特にデザイン学部の基幹科目では徹底的なアクティブ・ラーニングを行っており、毎回次の授業のために相当の準

備が要求される。学生たちは授業時間外でのこうした準備や課題制作を、「復習・予習」という言葉で捉えていないために、「しなかった」という回答を選択しているのだと思うが、実際には単位を取得するだけでも、60分などでは到底収まらないような、広義の復習・予習を恒常的に行っているとも言える。

■まとめ：

デザイン学部は、造形芸術学部での教育の実績を活かしつつ、これまでの問題点を解決するとともに、社会の要請に確実に応え得る新しいデザイン教育を目指して平成26年度に開設され2年を経た。学生のモチベーションも高く、教員も相当の手応えを感じている。今回のアンケート結果は、造形芸術学部とデザイン学部の学生を合わせた統計なので、必ずしも新学部の現状を示すものではない。例えば上記の「復習・予習」に関しても、実際には教員のほうが「よくぞ毎週これだけの量をこなしてくれてくるものだ」と感心することが多いということを記しておきたい。また、28年度は造形芸術学部の事実上最後の年度となるので、学部全体でしっかりケアしながら、学生に充実した教育内容を提供していくことで、授業アンケートがさらに良い結果となるよう取り組んでいく所存である。

(デザイン学部長 西本剛己)

9) 全学共通教育委員会

① 全学共通教育 委員長による講評

平成 27 年度の授業アンケートの結果を項目ごとに検討してみると、

Q1 の授業内容の理解度については、「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせた割合が、前期が 80.7%、後期が 82.6%となっており、これは 26 年度の前期 80.1%、後期 81.6%より僅かながら向上している。ただ、「全く理解できなかった」と回答している学生が 5%近くいることはいささか問題であり、授業内容や授業の構成の仕方について何らかの改善を図っていきたいと考えている。

Q2 については、授業の良かった点として「授業の内容」を挙げている回答割合が、前期 43.5%、後期 43.9%となっており、授業内容についての満足度は高いことが窺われる。

Q3 のシラバス活用についての質問では、「活用しなかった」と答えた割合が、前期 43.1%、後期 42.8%と高い数字となっており、これは昨年度と同様の数字なのであるが、電子媒体だけという現在のシラバスのあり方と履修登録の慌ただしさを見直す必要があることを如実に物語っているように思われる。

Q4 の予習復習に関する質問では、「全くしなかった」と回答した割合が、前期 48.5%、後期 42.9%という高い水準に達している。全学共通科目は授業の形式も内容も様々で多岐にわたるため一概には言えないものの、学生諸君を予習復習に導くような工夫が必要であることは確かであろう。

最後に、授業アンケートそのものについて一言書いておきたい。それは、そもそも授業アンケートを実施している目的は何であるのかを教員側学生側ともに再確認する必要があるのではないかということである。目的がはっきりしないことが、回答率の低下につながっているように思われてならない。目的が明確であり、アンケートが重要であると考えるのであれば、電子媒体ではなく紙ベースのアンケートに戻すということも検討しても良いのではないだろうか。

(全学共通教育委員会 吉川榮一)